

「神道史学会」に入ることになりそうです。森田さんのご尽力のおかげです。

神道史学会は、山田孝雄氏やまだ たけお、河野省三氏かの せいぞう、武田祐吉氏たけだ ゆきち、折口信夫氏しんぷ、安藤正次氏やすだ まさつぐ、

おもたかひさたか

澤瀉久孝氏さく、平泉澄氏きよしの面々が昭和27年に語らって立ち上げた学会です。

思えば、山田孝雄先生はとても偉いお方でした。独学の人として知られています。

「契沖、真淵、宣長うづたけ」以来の国学の伝統に連なる最後の国学者」とも評されます。

そして、何より真実の士であったことに感動を覚えます。梅沢伊勢三先生の、原稿用紙1000枚をも超える『記紀批判』の草稿原稿を手になさった山田孝雄先生は、じっと読み込まれて「そうなるか!」と、おっしゃったのでした。おえらいことです。

感動します。真実の士ですね。梅沢伊勢三先生は、その間冷や汗三斗だったそうです。

梅沢伊勢三先生いわく、「初稿の乱雑な全文を詳しく校閲なさってください、そして、幾つかの極めて重要な点についての示唆を与えられ、しかも全体として巨細にわたる有益な助言を賜った」とのことです。梅沢伊勢三先生は当時、無名で独学です。仙台市の米ヶ袋の、山田孝雄先生のご自宅に初対面で訪ねられた時のことでした。

武田祐吉先生は『校本万葉集』を作り上げた功績がおあります。

平泉澄先生は戦後もずっと頑張って居られました。戦前戦後首尾一貫しての活動は、稀有の事であります。尊敬するところで御座います。わたくしは、若いころから平泉澄先生のご著書を読み親しんでおりました。国体護持のための歴史を生涯にわたって説き続けたことから、「代表的な皇国史観の歴史家」といわれています。大切なことのありだと思います。

梅沢伊勢三先生を評価なさいました、山田孝雄先生につらなる面々です。それで「神道史学会」を評価しているわけです。今後が楽しみです。

楽しみは 待つにマツとて ツクモツクモに 罇田丹丹の 罇卒丹罇卒丹卒 卒小罇卒小罇丹

31アヤ、なおりカミ、ミワカミのアヤ

(神武天皇 ～ 6代孝安天皇)

初代カンヤマトイワハレヒト、(神武天皇)

29・6・7
31・1

8年 タケヒトさん(神武天皇)が、カシハラ(橿原)のミヤに、アマツヒツギ(天皇位)をしろし召されて、すでに8年目(アスス65年)の年になりました。尊称の意をあらわす呼び名として、(初代)カンヤマトイワハレヒト(神武天皇)のスヘラギと一般にも広く認識されました。

何故ならば、カミヨ(上世)の良い時代にまで戻って、二朝廷並立を、統一したアマキミです。統一の政治体制を作り上げたのです。「トのラシテ」に基づいての再構築なのでしたから、カン・ヤマ・トなのです。イワハレとは、「いわれる(祝福)」にも兼ねて地名のイワツレや、「い(こころ・意志)」が湧き立つようなの意味も込められています。「イワハレ」とは、幾つもの概念の複雑に絡み合った趣の深い言葉なのでした。

8年 この8年の年(アスス65年)は、キアエロヨミでのキアエ(1)に当たります。このアキ(秋)に、「コシウシロ(越後)」に派遣していたタカクラシタが帰京して、タケヒトキミ(神武天皇)に報告をしました。

『トミ(わたくし、臣)は、昔、ミコトノリを拝命して全国に平定を進めてまいりました。その地域は、トクニ【四国か? トサ?】から、ツクシ(九州)のミソフ(32アガタ)にも、まだヤマカケ(山陰地方)にも巡り行きまして、最後にはコシウシロ(越後)に至りました。コシウシロのヤヒコの山辺にツチクモのような人達が、屯(たむろ)して拒むのでした。そこで、ホコを用いて5回にも及ぶ合戦の末に反乱軍は悉くに収め殺したのでした。こうして平定しましたコシウシロの24アガタを、朝廷に献上します』

この故に、タケヒトキミ(神武天皇)は、タカクラシタをお褒めになって、キのクニのクニツコ(後の国造)に任じになられて、オオムラシ(大連)のカハネ(姓)も下賜されたのでした。

20年 さて、タケヒトキミ(神武天皇)の20年(アスス77年)になりますと、コシウシロのクニが、ハツホ(租税)の納税拒否の運動を起こしました。そこで、タカクラシタが再び平定に向かいます。そうしましたら、コシウシロの人々は、タカクラシタがタチ(ホコ)を抜く事なしに恭順の意を表すのでした。そこで、タケヒトキミは、タカクラシタをコシウシロのクニモリに任じになられました。そして「ヤヒコカミ」の称号をラシテに染めてお与えになられるのでした。

24年 タケヒトキミの24年(アスス81年)の事でした。

タケヒトキミには、まだ、お世継ぎのお子さんが居られませんでしたので、新しくオシモメ(3段階目のおキサキさんの位)を入れることになりました。クメ(ミチオミ)の娘さんのイスキヨリヒメ(ヨリヒメ)の入内(じゅだい)です。ところが、ウチミヤ(正皇后)のタタラエソスヒメから強い拒否が出されます。トノヰ(閨に入る)が出来ないでいました。そこで、イスキヨリヒメはヨリヒメと名を変えました。

24年 24年(アスス82年)の夏にカンヤマトイワハレヒト(イホヒト)さんが無事にこ出産なされます。

^{26年} タケヒトキミの26年（アスス83年）の冬には、また、キサキ（正皇后）のタタラ
井ソスヒメ（48歳）が皇子をお産みになられます。ヤスタレ【詳細は未詳。サミタレ4
0日のハシをいのあること、ヤスカワのカリヤか？ ^{30・31} アスス60年】にお祭りの
ためのミユキ（行幸）での出産でした。そこで、カヌカワミミ（ヤスギネ）さんと命名され
ました、のちの2代目スハラギ（綏靖天皇）に即位されるミコです。

^{30年} サミタレ（27）の年（タケヒトキミの30年、アスス87年）のナツ（夏）になって、
ヤヒコ（タカクラシタ）が、まだ（アスス65年にも来ている）、ミヤコ（カシハラ・檀原）
に上京してきました。そして、タケヒトキミ（神武天皇）にご機嫌伺いに挨拶を申し上げ
るのでした。タケヒトキミは、ミキ（お酒）を勧めますとかなりのサカツキ（杯）が重なり
ました。タケヒトキミはお尋ねになります。

『昔には、お酒が強くなかったはずでしたが、今は、飲めるようになりましたね。何か訳
があるのですか？』

ヤヒコ（タカクラシタ）は答えます。

『わが国のコシウシロ（越後）は寒くて、寒さ凌（しの）ぎに常に飲むようになりました。
た。そうしましたら、段々と酒好きになってきました』

これを聞いたタケヒトキミ（神武天皇）は、おっしゃいますのでした。

『ナンチ（汝）はサケ（酒）を飲むようになって、若やいできたようですね。お祝いとも
言うような事で、オシモメを妻にして下さい』

このオシモメ（3段階目のキサキの位）は、先のユリヒメ（イスキヨリヒメ）さんでし
た。すでにヤヒコ（タカクラシタ）は77歳になっていて、ユリヒメさんはハタチ（20
歳）です。ユリヒメさんは、コシに乗って、コシウシロのクニに嫁いで、男女一人ずつの子
供を儲けました。

ミツルナヒ

③ 5代カエシネ（考昭天皇）^{正皇后} キミのウチミヤになられたのがヨソタリヒメです。ヨソタリヒメは、ヤヒコとユリ
ヒメの子孫です。ヤヒコ（タカクラシタ）と、ユリヒメとの間に生まれたアメオシヲ、またその
孫がヨソタリヒメです。 ^{31・88}

さて、ユリヒメさんのオシモメへの入内からの物語には、色々な出来事がありました。

^{24・30年}

最初に、タケヒトキミ（神武天皇）に見染められたのはサユカワ（率川神社・
率川阿波神社 奈良市本子守町、率川坐大神神御子神社三座の所か？ タタラ井ソスヒ
メのお育ちになったアワミヤはここか？ ^{29・65、40・96}）にミユキ（行幸）の時の事
でした。クメのヤ（家）に一泊しての行幸の際に、クメの娘のイスキヨリヒメが給仕に出ま
した。それを見染めたタケヒトキミは、ツケ（告げ）のミウタをお詠みになりました。

かしはらの しけこきおやに

すがたたみ いやさやしきて

わがふたりねん

ここに、イスキヨリヒメは宮中に上がる事になりました。ところが、ウチミヤ（正皇后）
のタタラ井ソスヒメにクレームを付けられました。（タギシミミが横恋慕）強烈だったので、
トノイ（宿直）はせずについて、名前もユリヒメと変える事になりました。

タギシミミの横恋慕は、周囲をさらに巻き込みます。タギシミコ（タギシミミ）は、タケ
ヒトキミ（神武天皇）のご長男です。タギシミミは一計を計って、ユリヒメのチチのクメさ
んに、圧力をかけてコトの成就を図ります。クメさんとしても、娘を不憫に思っていたと
ころでしたので、娘が良いと言っなら、と答えます。そう言う経緯（いきさつ）から、ユリ

ヒメさんは父のクメさんに呼ばれました。しかし、ユリヒメさんは何か変だと気が付くのでした。そして、タギシミミの申し出に拒否を伝えるべく、ツツウタを詠(よ)みました。

あめつつち とりますきみと
なとさけるため

そこでタギシミミは、返歌を詠んで進めます。

にやおとめ ただにあはんと
わがさけるため

この、タギシミミのウタに、少しもユリヒメの表情は緩みませんでした。それで、またそのうちに。と体よい拒否だけ答えましたらタギシミミは去って行ったのでした。

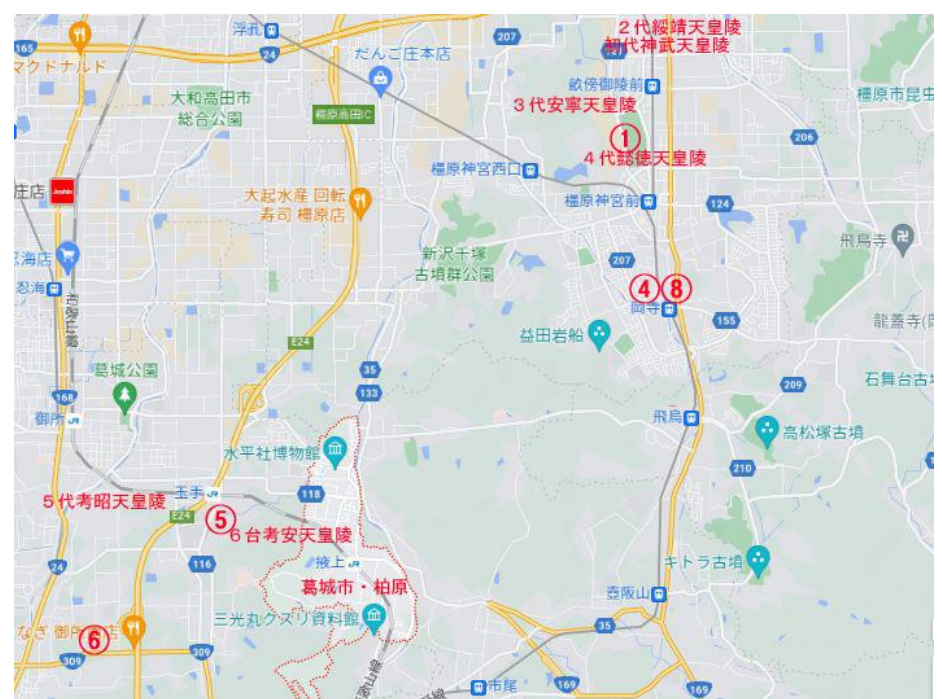
この事件を、コトメ(別のおキサキさん)がクシミカタマに告げました。そして、クシミカタマはタケヒトキミに申し上げるのでした。

『タギシミミ様のなされました、この事は、シム(色情・血縁)のハチ(恥じ)にあたります。そっと、内輪の内緒にして置く事が望ましいのではなでしようか』

タケヒトキミは、額(うなず)いて同意なさいますのでした。
この経緯がありましたので、ユリヒメさんはこの後の身の振り方について、ご自身も悩まれました、またタケヒトキミも悩んでおられたのでした。

そこに、77歳と言いましても、とても若やいできたヤヒコ(タカラシタ)が上京して来ました。タケヒトキミ(神武天皇)は、ヤヒコにユリヒメを縁付かせることになさいました。この縁組は、全ての関係者に角が立たずに丸く収まります。あれだけの素晴らしいおウタをお詠みになられるユリヒメさんですから、幸せをしっかりとお築きになられたのでしよう。男女をお産みになります。③の中ほどを参照。

(マメもミサホもあらわせり。39-71と、
ツツウタの秀歌と名高い)



31年 さて、サミト(28)に当たる、タケヒトキミの31年(アスス88年)のウツキ(4月)のハツヒ(1日)に、ミユキ(行幸)をなさいました。それは、カシハラ(橿原? 御所柏原かも?)から西南に約4km程行きましたワキカミ(奈良県御所市掖上・本間)のホホマのオカ(嘸間山の丘? 本間山? 水平社の博物館で有名)でした。タケヒトキミはホホマのオカを巡ってお登りになって見晴るかす付近の眺望を見られるのでした。おそらく、西から西南、南の方に向けてあり

ましたでしょうか？ それは、カツラキ（カタキ、葛城盆地）に向かったの事であったと、わたくしは推察しています。そして、おっしゃいます。

『アナニヤヤ』の7代アマカミのイサナギ・イサナミさんの国家再建に際して樹立されたのが、ウツコフ・マサキクニ【詳細は未詳】でした。カタチ（尊ぶべき所）はア（統合）・キツ（東・西）の実現での、まさに、「トのヲシテ」の精神の復活とも申せましょう。ア・キツ・シマ（締めり）と称賛されるクニの名前は、この故です。（『日本書紀』の、トンボ説は極めつけの大誤訳です）

次の8代のアマテルカミは、ヤマト（東海道諸国）をご親政なされまして、ウラヤスのクニと称賛されました。また、ヲシカト（勅任の執政官）を別け使わされます。「コエネクニ（北陸道諸国）と、ヤマト（東海道諸国）と、ヒタカミ（東北地方）と、チャルクニ（山陰道諸国）などでした。また、10代アマキミの弟の方のニキネさんの時代にはシワカミ・ホツマと称えられる国の名も現れました。

オオナムチは、イツモ（出雲）の国土経営に大成功を収めまして、ミヤにタマカキ（玉垣）を巡らして「ウチミヤ」と呼ばせるほどでした。しかし、これが、後に僭越の災いにもなったのですが、兎に角も国土経営は大成功でした。

10代アマキミの兄の方のホノアカリさんは、東北地方からナカクニ（今の近畿地方）への赴任に際して、イツ（伊豆）の沖から帆を上げて走る船は、あたかも空を駆け巡っているように見えました。その、イワフネ（祝い船）が、後のニキハヤヒ（養子）のミヤにと繋がったのでした』

^{422年} タケヒトキミ（神武天皇）の42年（アスス99年）の正月の3日（キミエ）に、弟

のカナナカワミミのミコトを世継ぎにと定められました。カガミのトミ（左の臣）はウサマロに、また、オオモノヌシ（右の臣）はアタツクシネが任じられました。共に、カナカワミミさんのモロハ（両翼）のトミとして、補佐をするべしとのミコトノリです。ミケ（供えの食物）をお供えして祝います。その他のヲモチキミ（重臣）にも、共にカナナカワミミたちを助けて補佐するべしと、タケヒトキミはおっしゃいますのでした。

^{76年} タケヒトキミ（神武天皇）の76年（アスス133年）の1月のモチ（満月）に、退位のミコトノリが出されました。

『吾れ（タケヒトキミ）は、既に老いたので、マツリコト（政治）から離れたいと思う。

当面は、ナオリナカトミ（左のトミ）と、オオモノヌシのオヤコ（親子）のトミに任せようと思う。左のアメタネコと、ウサマロ、それと右のクシミカタマと、アタツクシネですね。モロトミ（諸臣）はこの4人にて、ワカミヤのカナナカワミミ（弟の、後の綏靖天皇）を立てよ』

と、タケヒトキミはおっしゃいまして、ウチミヤ（後の皇居、橿原神宮）にお籠りになられます。そして、ヤヨイ（3月）の10日（キヤエ）にカミ上がり（崩御）されるのでした。

亡きタケヒトキミのおキサキさんのアヒラツヒメと、クシミカタマ（オオモノヌシ）とがウチ（後の宮中、橿原神宮）に長く入ってモ（喪）をお勤とめになられます。タケヒトキミが生きます如くにお仕えするモ（喪）でした。

さて、アメタネコと、アタツクシネ（クシネ）と、ウサマロがタケヒトキミの葬送の次第を相談して準備していますと、一長男のタギシミミが独断でマツリコトを執（と）るようになっていきました。

タギシミミの専横が明らかになりつつある事を、アメタネコと、アタツクシネ（クシネ）と、ウサマロが、ワカミヤ（皇太子）のカヌナカワシミさんに告げました。しかし、カヌナカワシミさんは、父のタケヒトキミのモ（喪）を務めることがもっぱらでした。何とも指示も答えありません。モロハノトミに任せたとのことです。つまり、アメタネコと、アタツクシネ（クシネ）と、ウサマロに何とかしておいてくれ。と、モ（喪）に服するばかりでした。さらに、ミオクリ（葬送）の儀の日程についても、モロハのトミに任せたと、カヌナカワシミさんはおっしゃいますのでした。

ところが、タケヒトキミの葬送についても、タギシミミは、何のかの、いじ付けて伸ばし伸ばしにして、一向に実現させようとしませんでした。さらに、策謀を巡らすタギシミミでした。つまり、二人の弟を暗殺しようとする謀（はか）るのでした。ウネビ（畝傍）のネ（峰）のサユ（さゆり）の花見にと、一馳走を並べてムロヤ（屋）に招くのでした。

これを知ったタタラエソスヒメはウタの添削をと、我が子でワカミヤ（皇太子）のカヌナカワシミに渡しました。イイロ（心象）を詠む歌だと言つタタライススヒメさんのウタを、カヌナカワシミさんが、ウタフタ（ウタミの札）を手にとって見ますと、

やゆかわゆ くもたちわたの
うねひやま このはさやきぬ
かせふかんとす

うねひやま ひるはくもとみ
ゆふされは かせふかんとそ
このはさやきぬ

の、フタウタ（2首）が染められていました。

カヌナカワシミさんは、この2首をみて、サユ（さゆり）の花見に暗殺の陰謀ありということに覺られます。

ミツルナビ

③ ヲシテ時代のカシハラは、檀原？ 柏原？

カシハラの現在地は、御所市の柏原説も有力です。御所市のHPからです。

「御所市「柏原」に鎮座するこの神社の祭神は「神倭伊波礼毘古命」。初代神武天皇の即位した場所であると言われています。享保21年（1736年）の大和誌には「檀原宮。柏原村に在り」と記し、本居宣長も明和9年（1772年）の「菅笠日記」に、畝傍山の近くに檀原という地名はなく、一里あまり西南にあることを里人から聞いたと記しています。

一説にはこの神社が宮跡に指定されると住民が他に移住しなければならなくなるので、明治のはじめに証拠書類を全て焼いてしまったと言われています」

うねひやまのウタにしても、檀原のミヤだったとすると、すぐ裏手の畝傍山に花見の宴もちよつとすんなり来ないです。

そこで、兄のカンヤサシミ（カンヤサミ）、後のミシロシエ、太安万侶の祖先）に相談します。

『タギシミミさんの行状には、以前から問題が多くありました。

い事を思い知りました。それで、弟のカヌカワミミを尊んで、自らは公的な立場から身を引きます。兄のカンヤヰミミさんは名前を、イホのトミのミシリツヒコと変えてトイチ(奈良県十市郡田原本町多、多坐弥志理都比古神社)に住みます。そして、亡きタギシミミさんのお祭りをネンコロ(憩ろ)になさいましたのでした。タギシミミさんの追善供養を、これをカミのミチ(31・38)と表現されています。

ミツルサビ

③ 多坐弥志理都比古神社の「多」とは太安万侶の住まいしていた「多」の地名です。ミシリツヒコの子孫に太安万侶が出ます。

カミのミチのこと。「直訳偽書の秀真伝(しゅうしんでん)」の人は「神道」に直訳しますが、間違いです。

いわゆる「神道」は、仏教伝来後に、わが国の風習を総じて名がついてきたようなものです。さらに、奈良仏教の全盛期、平安仏教の一般民衆への広まりを経て、さらに宗教臭が強くなってきました。ですから、ヲシテ時代の「カミのミチ」を直訳して「神道」に置き換え翻訳するのは大間違いです。カミのミチの言葉の典故個所は3か所だけです。

(ミ) 1 - 4、3 1 - 3 8、3 9 - 5 8)

31・39

2代目カヌカワミミ(綏靖天皇)

案1、カツラギ時代、2代〜6代・293年間

案2、平穩8代時代、1代〜8代・502年間

弟のカヌカワミミさんがヒツギの位(天皇位)をお継ぎになりまして、ニイミヤコ(新皇居)はカタキ(カツラギ、奈良県御所市葛城)に建設する事になりました。

さて、カツラギのタカオカのミヤにお移りになりますのは、アスス134年のツアエのハル(春)の1月元旦のサナエの日のことでした。タカオカのミヤは、奈良盆地を見遥るかす高台にあります。かなりの高所です。



元年

そして、1月の28日にカヌカワミミ(ヤスキネ)さんは52歳で、アマツヒツギを受け継ぎになられました。カヌカワミミのアマキミと称(ただ)えられて、タカオカミヤにて、ハツコヨミを公布になりました。カミヨ(上代)からの伝統のように、翌朝には、即位の際のタカミクツなどの拝観をタミにも広く公開するのです。

また、生母のタタライソスヒメを、ミウエ・キサキとして奉ります。そして、亡き父のカンヤマトイワハレヒコ(神武天皇)のオモムロ(亡き骸)を、カシオ(畝傍山の北東、神武天皇のご陵)にて納めてお見送りをします。アヒラツヒメとクシミカタマ(ワニヒコ)が思い出話をしつつお見送りしていますうちに、タケヒト(神武天皇)の亡骸に付き添って近習のトミ(臣)達がミササキ(ご陵)の中に入って行きました。そして、その中でオイマカリ(殉死)を遂げたのでした。翌朝にこの殉死の事が人々に知らされましたらば、33人も人がまたオイマカル(殉死)をするのでした。それ程にも、タケヒトキミは人々からお慕いされていたのでした。また、世の中の仕組みにも変化が表れて来ていたことも想像されます。

さて、この当時の世に歌われた流行りウタに、

アマミコが アメにかえれば

ミソミ(33人) オフ(追つ) マメもミサホも

^{2年} スハラギ（神武以降の天皇陛下）2代目のカヌナカワミミ（綏靖天皇）の2年（アスス135年）のハル（春）のことでした。おキサキさんの事が定まります。

ミススヨリヒメがウチツミヤ（正皇后）になられます。ミススヨリヒメさんはクシミカタマの娘でして、母はミラヒメさんでした。（大神神社の若宮（大直禰子神社）にミラヒメさんが祭られています）アタツ・クシネの妹（姉？）さんですね。また、シギ（磯城郡）のクロハヤのカワマタヒメをオオスケキサキになさいます。クロハヤはおそらくはオトシギの子孫でありましょう。また、アタ【詳細は未詳】の娘のアタオリヒメはスケキサキになります。カスガのアフエのモロ（アフエモロ）の娘のイトオリヒメはコクタエになります。コクタエはミコの指導にもあたり、ナガハシ（後の長橋）のラシテを司ぐる重要な役目の任です。【詳細は未詳】カダキ（カツラキ、葛城）のクニツコ（後の国造）のツルギネの娘のカツラヒメは、ウチキサキになります。その妹のカツラヨリヒメはシモキサキになります。また、アメトミの娘のキサヒメもシモキサキになります。この他に30人のおキサキさんがおいでになりました。

^{2年} 2年（アスス135年）のハツキ（8月）ハツヒ（一日）に、カヌカワミミ（綏靖天皇）さんはミコトノリを発せられます。

『昔に聞いたことがあります。それは、ワニヒコ（クシミカタマ）の祖先からのマメ（忠節）のことです。（27・73参照）』

ソサノヲさんの子だったオオナムチは、イツモ（イズモ、出雲）の国土経営の大成功と、ツカルへのクニ遷しの後にもまた大成功を収めました。コト（功績）為し終えての満足を言った時、ミモロカミ（クシヒコ、2代目オオモノヌシ）が海原に光り現われてまたイサメ（心を覚めさせる、諫め）言っのでした。「わたくしが在りてこそ、おおよそに為すことをせしめることが出来たのでした」と、クシヒコのミタマは言っのですね。クシヒコこそ、「サキミタマ」と言えるのでしょう。

また、時代が下ってワニヒコ（クシミカタマ）は、大きな功績からすれば「ワサタマ」と言えましょう。チチキミ（タケヒト・神武天皇）のヤマト討ちの時代の混乱を上手くサポートしてくれた功績はとても大きいものでした。

また、みたび【三度か？ 詳細は未詳】巡っての功績と言えます。ひとり時代が分かれ下ったワニヒコ（クシミカタマ）までが「ミワのカミ」であると讃えたいと思います。のちの子孫代々にわたっても、世々のスハラギ（神武以降の天皇陛下）の護りを為してください『ナカツキ（アスス135年、9月）11日に、カヌカワミミ（綏靖天皇）さんは、ミワのカミをお祭りなさいました。』（大神神社）そして、当代のアタツ・クシネ（クシミカタマの子）に、オオミワのカハネ（姓）を賜っのでした。この時、ワニヒコ（クシミカタマ）は192歳で栄誉の祭典に臨むのでした。

^{3年} さて、時（3年か？）にツクシ（九州）から、ミユキ（行幸）を求める声が上がって来ました。カヌカワミミ（綏靖天皇）さんは、代理を下される事になさいました。そのご名代にはナオリナカトミ（アメタネコ）が任じられました。アメタネコは、タケヒトさんの九州下りの際に守り役として付き添った経緯もありました。真っ先にナオリナカトミの赴いた先は、トヨ（豊前・豊後、今の福岡県と大分県にほぼ匹敵）のクニでした。ナオリの地域

（現在の太分県竹田市（たけた）直入、太分県由布市庄内町阿蘇野には、直入中臣神社があります）に、ナオリナカトミ（アメタネコ）が赴いた際に、九州全土からのミソフ（32、九州全土の32の地域）の又シの人々が集まり、ノリ（定め）を受けて動揺が定まったのでした。

3年つ 先の事でしたが、この年にはサミタシ（梅雨）が60日にも渡って降り続いたのでした。サナエ（稲）は病気になるってミモチ（イモチ病）に傷みました。これを告げる九州の人々からの窮状によって、ナオリナカトミ（アメタネコ）が使わされたのでした。イネ（稲）のナオリ（直り）を祈るハラヒ・カセフの祭りを為したのでした。ナオリナカトミ（アメタネコ）はじめミソフ（32）の九州の又シらが一心に祭りを努めて、イネも直ってきました。アキ（秋）には実りも充実しました。そこでホツミ（豊作）の祝いの祭りをするのでした。この事を始まりとして、タミのウフスナ【現代語の産土とは意味が違うようです。詳細は未詳】として、スミヨシと、モノ又シ（オオモノ又シ）と、ナカトミを合わせてナオリカミとして祭る事になりました。

ウサ（宇佐神宮）にイトウのミメカミ（3ヒメミコ、タケコ・タキコ・タナコ）を祭ります。また、アマキミ（2代スヘラギ・カヌカワミミ）は、ヒコユキを祭りのラミ（臣）のスケ（副臣）として任命したのでした【ヒコユキのこと、詳細は未詳】。

4年 2代スヘラギ・カヌカワミミ（綏靖天皇）の4年（アスス137年）のことでした。サヤの年でした。ウツキ（4月）にイホヒトさんがお亡くなりになりました。イホヒトさんは、カヌカワミミさんのお兄さんです。ミシリツヒコとして名乗っておられたのでした。

（後の子孫が多氏です。多氏には『古事記』の太安万侶が出ます。⑧ページ参照）

5年 2代スヘラギ・カヌカワミミの5年（アスス138年）のサヤトの年のナカツキ（9月）のモチ（満月）にミコ（皇子）が誕生します。ウチミヤ（正皇后）のミススヨリヒメがお産みになったタマテミ（シギヒト）さんでした。後に3代スヘラギ（安寧天皇）を継がれます。この翌年の6年のネシエの年のフユ（冬）には、オシモメ（第三位目のキサキ）のイトオリヒメがミコ（皇子）のイキシミコをお産みになりまして、スケキサキ（第二位目のキサキ）に上がられます。

25年 2代スヘラギ・カヌカワミミの25年（アスス158年）のサアトの年に、ヨツギ（世継ぎ）の決定がなされます。ムツキ（1月）3日の事でした。21歳のシギヒトさんを次代のお世継ぎとお定めになったのでした。

26年 この年（25年）のシモツキ（11月）の14日に、アメタネコが亡くなりました。アメタネコは、187歳でした。オモムロ（亡き骸）はミカサヤマに納めます。そして、カスガのトノ（春日大社）に併せて祭ることにします。ミカサのカハネ（姓）は嫡子のウサマロに継がせました。そして、ウサマロは、ミカサミとして尊称される事になります。

36年 2代スヘラギ・カヌカワミミの36年（アスス169年）のサツキ（5月）10日に、スヘラギがお亡くなりになりました。2代スヘラギ・カヌカワミミさんは84歳（87歳が正しいか？）でした。ワカミヤ（皇太子）のシギヒトさんは、この夜からモ（喪）に服することになります。そして48日のモ（喪）が過ぎまして、イサカワ（率川神社か？）にミソギ（禊ぎ）をなさいます。チのワの潜（くぐ）り祓いをされてから、ミヤ（政庁）にお出ましになられるのでした。先のカヌカワミミさんにお仕えしていた近習のトミ（臣）達

は、亡きスヘラギのミタマを祭る事に専念します。そして、皇太子シギヒトさんに仕えるトミ達と、入れ替えになって3代目スヘラギを支えてゆきます。

3161

3代目タマテミ、(安寧天皇)

元年

時はアススの170年のネアト(50)の年の事でした。3代目スヘラギのタマテミ(シギヒト)の即位が執(と)り行われます。シギヒトさんは、33歳でアマツヒツキ(天皇位)を受け継がれます。そしてタマテミのアメのスヘラキミとして3代目スヘラギを名乗られるのでした。

アスス138

シギヒトさんの誕生の時の話がありました。チチキミ(2代カヌカワミミ)が、ココナ(菊)の花見をしようと、シギのクロハヤのタチ(屋敷)に行幸なさいました。(志貴(磯城)御県坐神社(桜井市 金屋)のところが? 10代のミマキ(崇神天皇 キミの皇居のところ)

この際に、ミススヨリヒメ(正皇后)とカワマタヒメ(オオスケキサキ)をお連れになられたのでした。さて、ミススヨリヒメはここで、産気付かれました、が三日間お辛くて病がちになられます。そこに、メヲ【女性と男性、男性はタマテヒコ、夫婦か?】が尋ねてきて助力を申し出るのでした。キミ(2代カヌカワミミ)はタマテヒコ【未詳】に手助けを頼みます。そうして、無事にミコ(皇子)を出産出来たのでした。タマテヒコの手助けが良かったのでした。キミ(2代カヌカワミミ)もホッとなさいますのでした。ご出産なさいました朝に、シギのクロハヤのタチ(館)に朝日が輝いていました。そこで、タマテミがイミナ(実名)を「シギヒトさんにしては如何でしょうか?」と薦(すす)めました。キミ(2代カヌカワミミ)も、良しとなさいまして、ミススヨリヒメ(正皇后)のお産みになったミコはシギヒトと名付けられたのでした。また、タマテヒコの事をお褒めになろうとなさいまして、カハネ(姓)を問われになりました。タマテヒコは「モリの子孫だと言います。また、女性のほうはカツテの子孫だと答えました。そこで、ワカミヤのウシ、モリのカミと褒め名を与えになりました。さらに、「モリとカツテの祖先祭りをヨシノ(吉野)にすることになさったのでした。現在にも、吉野水分神社(子守神社)、勝手神社(焼失中、義経と静御前の悲話もあり)、として共に吉野山に祭られています。』(『延喜式』にも記載の古社)

元年

さて、シギヒトさんは、3代目スヘラギのタマテミとして即位をなさいました。母のミススヨリヒメをミウエキサキとして尊重なさいました。

この事などから、シギヒトさんは、イミナ(実名・まことな)もお呼び名もシギヒトさんと申し上げるのでした。

元年

アスス170年カンナツキ(10月)の11日に、先代の2代目スヘラギ・カヌカワミミ(綏靖天皇)のオモムロ(亡き骸)を、ツキタオカ(桃花鳥田丘上陵、橿原市四条、畝傍山の北東辺、(ツキはサンコウチヨウか? ヒ・ツキ・ホシ ホイホイホイ)(トキ・朱鷺との関係は? ツキタを何故? 桃花鳥と漢訳したのか?)にお納めします。

2年

アススの171年のキミエ(51)の年に、新ミヤコにお遷りになります。新ミヤコはカタシホのウキアナに定まりました。畝傍山と、二上山との中間に位置します。(大和高田市片塩町・石園坐多久虫玉神社(いはその・いその、タクムシタマはどうでしょうか? 虫は豆が本意か? タクツタマ?)『延喜式』記載あり、が有力な現在地か?)

3年

アススの172年のキミト(52)の年ハツ(1月)に、キサキの事が定まります。ウチツミヤ(正皇后)にはヌナソヒメがお立ちになります。ヌナソヒメは、アタツ・クシネ

の子のオウエモロ（アフエモロ）が又ナタケを娶って産まれた娘さんでした。兄にイカツも産まれています。

シギのハエの娘さんのカワツヒメをスケキサキ（第一位のキサキ）になさいます。

また、これより先に、アフエモロの子のオオマが儲けたイトヅヒメをナガハシ（ヲシテを司る、長橋）のキサキになさっていました。イトヅヒメは、イロキネのミコ（皇子）をお産みになります。イロキネさんは、トコネツヒコと名乗ります。このイロキネさんの誕生があったので、イトヅヒメはオオスケキサキに上がられるのでした。

また、カワツヒメもミコ（皇子）のハチキネさんをお産みになります。ハチキネさんは、シキネツヒコと呼ばれる事になります。

^{4年} 3代スヘラギ・タマテミの4年（アスス173年）のツヤエ（53）の年に、ウチミヤ（正皇后）の又ナソヒメがミコのヨシヒトさんをお産みになります。ウツキ（4月）15日のことでした。ヨシヒトのミコは、後に4代目スヘラギ（懿徳天皇、うるわしい・良い・精神的な能力）に即位なさいます。オオヤマトヒコ・スキトモと名乗られます。

この年に諸臣の累進が定められます。タケイカツ（イカツ、又ナソヒメの兄）と、イツモシコ（ウマシマチの4代目の子孫）がケクニトミ（重臣、ホ 31-70、ホ 31-85、ホ 31-89、ホ 32-36、ホ 36-17）に任じられます。また、オオネトミ【詳細は未詳】は、イワイヌシに任じられました。

^{6年} 3代スヘラギ・タマテミの6年（アスス175年）のムツキ（1月）15日に、又ナソヒメさんはお二人目のミコのトギヒコさんをお産みになります。トギヒコさんは、クシトモセと名乗ります。

^{11年} 3代スヘラギ・タマテミ（安寧天皇）の11年（アスス180年）ハツミカ（1月3日）に、ヨツギミコ（お世継ぎ）をお定めになります。ヨツギミコは、この時8歳のヨシヒトさんでして、後に4代目スヘラギのスキトモ（懿徳天皇）になるとなります。

^{33年} 3代スヘラギ・タマテミ（安寧天皇）の38年（アスス207年）のサミア（27）の年の、シハス（12月）6日に、タマテミさんが崩御なさいました。御齡70歳のことでした。ワカミヤのヨシヒト（スキトモ）さんは48日のモ（喪）を務められますので、正月のコトホキ（お祝い）の行事もしない事になりました。48日間のモ（喪）を終えられまして、イサカワ（率川神社か？）にミソギをなさいますから、ミヤにお出ましになりますのでした。

また、先代のスヘラギに近くお仕えしていたトミ（臣）を、ウキアナのカミ（3代タマテミ）をお祭りするために専念させまして、生きます如くに仕えさせるのでした。この年のアキ（秋）ホツミ（8月）には、タマテミさんの亡き骸を、畝傍山の西南のミホト（橿原市吉田町、御陰井上陵）に送り納めました。

3174

4代目スキトモ、（懿徳天皇）

元年

時はアスス208年のサミト（28）の年の事でした。4代スヘラギのスキトモさんがご即位なさいます。キサラキ（2月）4日のネアエ（49）の日に、ワカミヤのヨシヒトさんが36歳でアマツヒツキ（天皇位）を受け継がれまして、オオヤマトヒコ・スキトモのアメスヘラギと称（ただ）えられます。ニキネさんからの伝統のアメのノリを以って、人々に拝ませるのでした。新ミヤコはカルのマカリオ（軽曲峡宮、橿原市久米町）に建て

られました。そして、マカリオのミヤのコヨミをこの年に始められます。

この年、4代スハラギのスキトモ（懿徳天皇）の元年ホツミ（8月）ハヒ（1日）。先代スハラギのタマテミさん（安寧天皇）の亡き骸を、畝傍山の西南のミホト（橿原市吉田町、御陰井上陵）に送り納めました。この日と、シワス（12月）の6日（一周忌に相当します）には、モハ（喪服）を召されるのでした。

ナカツキ（9月）の13日に、スキトモさん（懿徳天皇）のご生母の又ナソヒメをミウエキサキとなさいます。

2年 4代スハラギのスキトモ（懿徳天皇）の2年（アスス209年）のムツキ（1月）の5日に、ニイミヤコ（新皇居）のカルのマカリオ（輕曲峡宮、橿原市久米町）にお遷りになりました。そして、次の月のキサラキ（2月）の11日に、ウチミヤ（正皇后）としてアメトヨツヒメさんが立たれるのでした。

シギのオテの娘のオツミヒメがスケキサキ（第1位のキサキ）になります。また、アウアモロの孫のフトマワカの娘のイイヒメをココタエのキサキとなさいました。

5年 4代スハラギのスキトモ（懿徳天皇）の5年（アスス212年）のヤヨイ（3月）のコミツキ（7日ぐらい）に、スミエ（住吉神社、大阪市住吉）にミユキ（行幸）をなさいました。スミエの海岸でミル（海藻、海松）を見られるのでした。そこで、ウチミヤ（正皇后）のアメトヨツヒメがミコ（皇子）をお産みになりましたので、ミルヒトさんと名付けられたのでした。ウチミヤ（正皇后）のアメトヨツヒメの父親のイキシミコを、ヲキミ（重要なトミ（臣））に任じられるのでした。

また、イイヒメはタケアシ【詳細は未詳】にお産みになられたミコは、タチマミコとしてイミナ（実名）をタケシオさんと名付けられました。

27年 4代スハラギのスキトモ（懿徳天皇）の22年（アスス229年）のキサラキ（2月）ツシト（44）の年の、ハツ（1月）の12日に、カアシネのミコ（皇子）を世継ぎとして定められました。カアシネ（ミルヒト）さんは、18歳の事でした。

34年 4代スハラギのスキトモ（懿徳天皇）の34年（アスス241年）に、カアシネさんは崩御なさいました。ナカツキ（9月）の8日の事でした。ワカミヤのカアシネ（ミルヒト）さんは、亡き父上にもっぱらに仕えようとなさいまして、モ（喪）のハ（衣服）をヒトセ（1年間）までお召しになられたのでした。そして、ミアエ（お食事）を、生きます如くに捧げてお仕えなさいました。ようやく、翌年のフユ（冬）のアスス242年に、畝傍山の南のマナコタニ（橿原市西池尻町）に、スキトモさんのオモムロ（亡き骸）をお送りするのでした。スキトモさんは69歳でお亡くなりになられたのですが、翌年のモ（喪）の1年を足して、70の世としてお送りするのでした。

31-83

5代目カアシネ、（孝昭天皇）

元年 5代スハラギのカアシネさんは、カタキ（カツラキ）のオケココロの新ミヤ（御所市池之内か？）に、ミヤコ（首都）をお移しになりました。そして、オケココロのコヨミを此処に始められます。アスス243年として、カアシネさんの31歳の時の事です。

元年 5代スハラギのカアシネ（孝昭天皇）さんの初年に、イツシココロをケクニトミ（重臣）に任じになりました。

サカイオカ【詳細は未詳】

さて、昔、カエシネさんがワカミヤ（皇太子）であった時からの事でした。

ワカハエの娘のヌナキヒメをスケの位置になさっておられました。また、サタヒコ【詳細は未詳】の娘のオオサヒメはナカハシ（のちの長橋）の位置に任じて、フシテを扱う事を任せておられました。カリスケとしての位でした。この他にウチハハ【ウチキサキと、同位置か？ 詳細は未詳】として6人、また、シモ（オシモメ）4人。アオメは30人おられました。

^{29年} 5代スヘラギのカエシネ（孝昭天皇）さんの29年（アスス271年）に、キサキが定まります。ウチミヤ（正皇后）には、ヨソタリヒメが選ばれました。ヨソタリヒメは、15歳でした。この、ヨソタリヒメは、昔、ヤヒコ（タカクラシタ）にユリヒメを賜りて産まれたアメサタキの、子がアメオシオでして、アメオシオの孫娘にあたるのがヨソタリヒメです。ヨソタリヒメの兄のヨソタリは31歳でして、ウチミヤの兄として、カエシネさんにお仕えます。オキツヨソとしてケクニトミ（重臣）に任じられます。

^{45年} 5代スヘラギ・カエシネ（孝昭天皇）の45年の、サツキ（5月）の15日に、正皇后のヨソタリヒメがオシギネのミコ（皇子）をお産みになりました。オシギネは、アメタラシヒコクニのミコと呼ばれます（後のカスガ・フキミ）。

^{49年} また、5代スヘラギのカエシネ（孝昭天皇）さんの49年（アスス291年）のキミの年のハツヒ（1月元旦）に、ヨソタリヒメはオシヒトさんをお産みになります。オシヒトさんは、後に6代目スヘラギを継ぐヤマトタリヒコクニのミコ（孝安天皇）です。オシヒトさんの誕生の朝、朝日がとても美しく輝いたと伝えられています。

^{68年} 5代スヘラギのカエシネ（孝昭天皇）さんの68年（アスス310年）のムツキ（1月）14日に、オシヒトさんをワカミヤ（皇太子）となさいました。オシギネは、ハタチ（20歳）での事でした。翌日の15日には、兄のオシギネをフキミ（準皇太子）に定められました。カスガの称号を授与なさいましたのでした。

^{83年} 5代スヘラギのカエシネ（孝昭天皇）さんの83年（アスス325年）のアキ（秋）のハツキ（8月）5日に、カエシネ（孝昭天皇）さんが崩御なさいました。時に、113歳の事でした。トミ（臣）もキサキも、そのままに亡きカエシネさんにお仕え申し上げるのです。ミコのオシヒトさんは、亡き父君に仕えると共に、タミを治めますのでした。

その良きさまを見た兄のオシギネさん（カスガ・フキミ）は、弟のオシヒトのキミ（皇太子）に忠節を誓います。さらに、オシギネさんの子孫のソトミ（10氏）も忠節にいとまなく仕えるのでした。その10氏は、オオヤケ、アワタ、オノ、カキモト、イチシ、などでした。『古事記』は、10氏の全部を載せる

そして、タリヒコクニ（5代スヘラギ・孝安天皇）のキミは、毎年、ハツキ（8月）5日から、8日間のモ（喪）をお祭りして父君を偲んでおられるのでした。まさに、マコトなるかなの事々です。

3195

6代目タリヒコクニ（孝安天皇）

元年

時はアススの326年の事でした。弟のオシヒトのミコが、アマツヒツキ（天皇位）を受け継がれて6代スヘラギのタリヒコクニとして即位なさいます。ハツ（1月）ソカ（10日）の事でした。オシヒトさんは、即位の式典の翌朝に、前例どおりに、カサリ（即位の儀式の設え）をタミに拝ませるのでした。

そして、キサキの次第を定められます。

シギのナカハ卫の娘のナカヒメをオオスケキサキとなさいました。トチサカヒコの娘のサカヒメは、ウチキサキで、ナカハシ（後の長橋）に位置してラシテを司る役目になりました。この他のキサキ達もあわせて、すべて12人おられました。

^{2年} 6代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の2年（アスス327年）のフユ（冬）に、ニイミヤコ（新首都）のムロのアキツシマ（御所市室）に移られるのでした。

^{11年} 6代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の11年（アスス336年）に、天候異常のムレクモ（日差しが少ない）が起きて、稲穂に虫が大発生するのでした。この知らせを聞かれたタリヒコクニさんは、おん自らにハラヒのカセフ（風を起こして払う）の祭りをおこなわれました。この故に、イネ（稲）も蘇（よみが）えりまして、ミツホ（租税）も納められる程になりました。ホツミの祭りを執り行つのでした。

^{26年} 6代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の26年（アスス351年）のキサラキ（2月）の14日に、オシヒメさんをウチミヤ（正皇后）に入られました。オシヒメさんは、カスガラキミ（5代カエシネ（孝昭）の兄、オシキネ）の娘さんで、この時13歳でした。

^{33年} 先代のお亡くなり後の33年の後、つまり、アスス356年の、ハツキ（8月）14日に、先代の5代目カエシネ（孝昭）さんのオモムロ（亡き骸）をハカタのホラ（御所市三室、掖上博多山上陵）に納めます。近習のトミ（臣）やおキサキさん達の亡き骸も、一緒に納めました。また、この時に残っていた3人は、アメミコノリ（神武天皇の故事）に拠りオヒマカリをしたのでした。

^{51年} 6代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の51年（アスス376年）の、ナカツキ（9月）のハツヒ（1日）にキサキ（正皇后）のオシヒメさんが、ネコヒコのミコをお産みになります。ネコヒコさんは、オオヤマト・フトニのミコ（孝霊天皇）と呼ばれて後に7代スヘラギを継がれます。

^{76年} 6代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の76年（アスス401年）、ハル（春）のムツキ（1月）の5日に、フトニ（ネコヒコ）さんがヨツギミコ（皇太子）に定められます。フトニさんは26歳の事でした。

^{92年} 6代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の92年（アスス417年）に、スルガのミヤ（ハラミ）からハラミの王（富士山の絵）が献上されてきました。ミコ（皇太子）のフトニさん（42歳）は、誉めるようにと推薦するのでしたが、タリヒコクニ（孝安）さんはさほどにもお感じにはならませんでした。

^{102年} 6代スヘラギのタリヒコクニ（孝安天皇）の102年（アスス427年）のムツキ（1月）5日に、キミ（孝安）は崩御なさいました。137歳でした。

ミコのフトニさんはモ（喪）を務められます。そして48日の後にワカミヤ（皇太子のミヤ）にお出ましになります。ナカツキ（9月）5日に、オモムロ（亡き骸）をタマテ（御所市玉手、玉手丘上陵）にお納めします。この時に5人の人がオヒマカリをしまして、共にタマテのミササキ（陵墓）に納めるのでした。アキツカミとして称（ただ）えるのでした。アキツとは7代アマカミのイサナギ・イサナミさんのご治世を讃えた呼び名でした。（念のため、添えます。アキツとはトンボの事では断じてあり得ません。トンボは、誤訳の極みと申せます。漢字文への翻訳で『日本書紀』は大きな罪作りをしたものです。

わが国は、トンボ国ではありません。明らかなるの意味の讃え言葉がアキツです）

時代区分の新たな呼び方

カツラギ時代、2代〜6代・293年間 欠史ケッシ8代の呼び名を改めて「平穩5代」か

初代〜8代・502年間 欠史ケッシ8代の呼び名を改めて「平穩8代」

初代タケヒト（神武天皇）アスス58年（BC328）〜
2代カヌカワミミ（綏靖天皇）アスス134年（BC252）〜
3代タマテミ（安寧天皇）アスス170年（BC216）〜
4代スキトモ（懿徳天皇）アスス208年（BC178）〜
5代カエシネ（考昭天皇）アスス243年（BC143）〜
6代タリヒコクニ（考安天皇）アスス326年（AD90）〜
7代フトニ（孝靈天皇）アスス428年（AD43）〜
8代クニクル（孝元天皇）アスス504年（AD119）〜アスス560（AD175）

これより以下に、31・18のタケヒトさんの「宣言」の解説を、再度掲げます。
カツラギ時代の始まりが起きます。

ホホマの才力での「宣言」です。

『「アナニエヤ」の7代アマカミのイサナギ・イサナミさんの国家再建に際して樹立されたのが、ウツユフ・マサキクニ【詳細は未詳】でした。カタチ（尊ぶべき所）はア（統合）・キツ（東・西）の実現での、まさに、「トのヲシテ」の精神の復活とも申せましょう。ア・キツ・シマ（締めり）と称賛されるクニの名前は、この故です。

次の8代のアマテルカミは、ヤマト（東海道諸国）をご親政なされまして、ウラヤスのクニと称賛されました。また、ヲシカト（勅任の執政官）を別け使わして、「コエネクニ（北陸道諸国）」と、ヤマト（東海道諸国）」と、ヒタカミ（東北地方）」と、チタルクニ（山陰道諸国）」などでした。また、10代アマキミの弟の方のニキネさんの時代にはシワカミ・ホツマと称えられる国の名も現れました。

オオナムチは、イツモ（出雲）の国土経営に大成功を収めまして、ミヤにタマカキ（玉垣）を巡らして「ウチミヤ」と呼ばせるほどでした。しかし、これが、後に僭越の災いにもなったのですが、兎に角も国土経営は大成功でした。

10代アマキミの兄の方のホノアカリさんは、東北地方からナカクニ（今の近畿地方）への赴任に際して、イツ（伊豆）の沖から帆を上げて走る船は、あたかも空を駆け巡っているように見えました。その、イワフネ（祝い船）が、後のニキハヤヒ（養子）のミヤにと繋がったのでした』